

寧楽書院開設

百二十五周年記念

奈良の大学を考える

フォーラム

第二部 講演

幕末明治の浮世絵

— 陳玄堂コレクションについて —

前学長 赤井達郎

百四十五点の浮世絵

一階の展示室に並んでおります浮世絵についての見所のようなお話ができたと思います。この浮世絵は昨年、奈良の旧家の中山家から、百四十五点寄贈していただいたものです。

お手元に配っておりますプリントは、その中の一枚です。写楽や北斎の浮世絵と同じ大きさ、いわゆる大判錦絵という多色刷りの引札です。引き札というのは、商店の宣伝用のチラシです。奈良北袋町にあった「中山筑陽院」という店は墨や筆など文房と薬を売っていたことがわかります。興味深いのは、ちよつと読みにくいのですが、一番横の部分に小さな字で、奈良の北御門町の福島鶴蔵という男が

出版したと書いてあるところ

ろです。

もう一

枚は、明

治七年に

出版され

た「大和

名勝豪商

案内記」

で、名勝

と豪商が並んだエッチング・銅版

面の横本です。そこに「陳玄堂中

山助蔵」とあります。助蔵につい

ては、奈良町奉行の川路聖謨の日

記「軍府紀事」に、「奉行所に出

入りする商人の頭」とあり、春日

大杜の一の鳥居横の燈籠にもその

名前がみえ、かなり大きな商人だ

ったことがわかります。

助蔵らの時代、嘉永から明治の

始めまでの間、その頃の奈良がど

んな町であったのかを考えてみた

と思います。

### 厚い文化の層

奈良の町は、江戸の町よりも文化が高かったのではないか、いや、高いというよりは、文化の層が厚かったと思います。



さきの川路聖謨の日記には、奈良の町についていろいろなことが書かれています。奉行所内のお稲荷さんの祭燈籠について「江戸の初午の燈籠よりも絵はよろしい。」と記しています。絵描きが描いたのではなく、町の人の描いた絵についてそう記しているんです。

それから、「豆腐屋、八百屋までが謡をしており、老若男女みな能を楽しんでる」とも記し、奈良の町人の教養の高さにおどろいています。

また、「門番が茶の湯をする」となどつけあがりしたことなりけり、十人よりでは四、五人は歌をよむなり、江戸の百分一もよくよむ人はなし。」と記しています。奈良の町人は半分ぐらい歌をよむが、上手なものはごく少ない、ということです。奈良の人は歌が下手だと言うのです

が、下手でもいいと思います。一人の有名な歌人が歌を読むのではなく、奈良の人みんなが歌をよんでいるんです。



文の都 奈良

おもしろいのは、奈良の町人と江戸っ子をくらべ、「大和には真心影流の免許と七三の勝負をするものはあらじと思うなり、武のことはなきがごとし、関東の百姓とは大いなる相違なり、武家の都とはならぬところここにあり」といつていることです。奈良の町は「武の都」とはならない。奈良は文の都だということです。奈良のお奉行さん川路聖謨がいったように、ほんとうの「文の都」になりたいと思います。

そういう文の都である奈良の町を支えたのが、この中山助蔵たちであったと思うのです。奈良の町人が残してくれた浮世絵が奈良教育大学に入ったのはたいへん嬉しいことです。

「寧楽書院開設百二十五周年記念特別企画 奈良の大学を考えるフォーラム」(平成十一月十八日)の第二部として行われた講演「幕末明治の浮世絵」をまとめたのであります。前号「ならやま」二〇〇〇年秋号には、第一部の記事があります。あわせてご覧ください。